

## 景気動向指数研究会 議事概要

1. 日時：平成 20 年 6 月 27 日（金）13：30～15：30

2. 場所：共用第 3 特別会議室（中央合同庁舎第 4 号館）

3. 出席者：

（委員）

吉川 洋座長、小峰隆夫委員、嶋中雄二委員、櫛 浩一委員、福田慎一委員

（事務局）

岩田一政経済社会総合研究所長、鈴木英之総括政策研究官、  
妹尾芳彦総括政策研究官、後藤元之総務部長

4. 主要課題：

（1）C I を中心とする景気動向指数への移行及び最近の動きについて

（2）景気動向指数の改善について

（3）その他

5. 議事進行：

開会

C I を中心とする景気動向指数への移行及び最近の動きについて

事務局より、平成 20 年 4 月分景気動向指数（資料 1）と資料 2 に基づき、C I を中心とする景気動向指数への移行及び最近の動きについて、4 月分の景気動向指数の動きと基調判断について説明があり、その後、意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

- ・ 景気動向指数が D I 中心から C I 中心の公表に移行した。その際、公表資料の中に基調判断を記述しているのが大きな改善点であり、評価する。また、基調判断の基準を事前に公表し、機械的に基調判断を行ったことも、高く評価する。
- ・ 大きな特殊事情がある場合には、景気動向指数の基調判断は常に機械的に行い、その上で補助的な情報として特殊要因を説明する方が良い。
- ・ C I による基調判断を機械的に行っていることが、周知徹底されていないのではないかと。また、基調判断を掲載する場合に、一般にもわかりやすいよう、「景気動向指数により機械的に見れば」という言葉をつけた上で、基調判断を掲載したらどうか。
- ・ 基調判断の基準については、わかりやすい表現を工夫してほしい。
- ・ ヒストリカル D I が、12 ヶ月移動平均やスペンサー項移動平均を求める計算において、データが不足している場合には欠落項を補わないなどの特殊な前提の上で試算された

ものであることを、説明すべき。

- ・ 現在ヒストリカルD Iを基に山・谷の決定を行っているが、山・谷の判断をどのように行っていくかは、将来的な課題となるだろう。

#### 景気動向指数の改善について

事務局より、資料3に基づき、景気動向指数の改善について説明があり、その後、意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

- ・ 個別系列が製造業に偏っている。米国では、4分野（生産・売上・雇用・所得）の指標に集約している。各分野のバランスを取ることは、重要だと考える。
- ・ 構造変化を考慮し、採用系列を改善した方が良いだろう。諸外国では、一致指数よりも先行指数が重視されている。わが国でも、先行指数の役割を考えた上で、改善を行うべきではないか。
- ・ C Iに基づいて景気のスピードやレベルを見る上で、採用系列に偏りが無いかといった点は重要になる。
- ・ C I総合指数、一致遅行比率や先行一致比率なども、試算したらどうか。
- ・ 各都道府県でC Iを作成する場合、サービス・セクターが大きい地域、農業セクターが大きい地域といったように地域差があるため、各地域で共通の系列から景気指標を作成するのは難しいのではないか。一方、各都道府県が地域の特徴が出るように指標を選んで作成する場合も、指標の選択方法などを統一のロジックで説明できるようにすべきである。

#### その他

会議資料の公表方法など、本研究会の運営の透明性を高める観点から、「景気動向指数研究会運営規則」を資料4の（案）のとおり定めることで合意した。

閉会